

カスミが通勤路にもしている自宅近くの公園を横切っていると、目の前のベンチに黒いスーツを着た初老の男がいた。

(なんだ？あいつは)

普段自分が帰宅する時間にベンチに座っている人間なんかいないのを知っているカスミは男に警戒しながらベンチの前を通過した。

「うわー!?」

次の瞬間何かにぶつかった衝撃で驚くと、目の前に先程ベンチに座っていた初老の男がいた。

「こんばんわ」

初老の男はにこやかにカスミにそう言ったが、カスミの頭の中は混乱していた。

初老の男が座ってたベンチと自分の距離は2mは確実に離れていた。

今日の前にいる初老の男は一瞬にしてこの距離を移動してきたということになるが、2mの距離を一瞬にして移動するなんて多分陸上の金メダリストだつて無理なことだろう。

混乱しつつもカスミは今すぐこの場から逃げることにするとくるつと後ろを振り返った。

しかし目の前には同じ初老の男がいた。

再び後ろを振り返ったが結果は同じだった。

「逃げられないよ」

何度かそんなことをくり返した後、初老の男のその言葉でカスミは観念するとやっと口を開いた。

「何の用事ですか?」

「私は観光で日本に来たんだが、君と一緒に暮らすのに最適だと判断した。だから一緒に暮らして欲しい」

「は?」

「無理なことではないだろうか?」

「無理です!」

カスミのリアクションは至極真つ当なリアクションだったが、初老の男は小さなため息をつくとスーツと同じ黒の中折れ帽をクイツと上に向けた。

余裕すら漂わせるその態度にカスミの苛立ちは一気にあおられそうになったが、大きくため息をつくと苛立ちをなだめた。

「とにかく私急ぐんでどいて下さい!」

「それは無理だ。お前が私と一緒に暮らすと承諾しなければごくことはできな!」

「ふざけたことを言わないで下さい!」

「ふざけてなどいない。私はいたって真面目だ」

このままではうちが明かないことを察すると、カスミは初老の男の横にスツと出た。

「おっと、逃げようなどと考えてはいけないよ」

素早く出された腕にはばまれた。

カスミは男をぎつと力の限りの怒りを込めてにらみつけたが、相手には効果全くないようで再び冷静に見つめる視線だけがカスミに注がれた。

「お前はソロモン72柱というのは知っているか？」

「は？」

「知らぬのか？ 仕方がない、説明してやろう」

男は自分が人間の世界でソロモン72柱の一番目であるバルで、日本には観光に来ていること、カスミを一目見て自分と生活するのにかさわしい人間であるということとをすぐに見抜いたことを説明した。

「だから私はあなたと一緒に生活をしなければならいんですか？」

「ああ。私と一緒に生活をするのならいろいろ面倒を見てやるぞ？ 確かに人間はギャンブルが好きなんだろう？ お前が望めば大当たりを出してやることも簡単だぞ？」

「必要ありません」

「おや、お前はギャンブルが嫌いなのか？」

「そもそも興味がありません」

「…珍しい人間もいるものだな？より一層一緒に暮らしてみたくなくなったぞ」

「私は一緒に暮らしたくありません！」

バルはカスミの態度にため息をつくと進行を妨げていた腕を下ろした。カスミはそれを見て一瞬戸惑ったが、全力疾走で公園から出た。

翌日、カスミは会議の席で責任感がない技術者がいることについて話題にした。

「ところで私山田さんの件についてちょっと話したいことがあるんです」「なんだ？」

「はつきりいわせて頂きますと、山田さんはサポートにまわした方がいと思っんです」

カスミは自分がやってきたフォローも含め、同僚からも被害を集め、上司に話していたが、いまいち上司を納得させて最前線から外すと判断させるためには説得力に欠ける材料ばかりだと思っていた。

「…で、カスミ君は山田をサポートにまわした方がいと考えているのか？」

「はい。山田さんは技術者としての知識にも欠けますし、できればサポートにまわした方がいと思っんです」

「…山田はどう思っんだ？…」で話題にするくらいなんだから、よっぽどのことだと思っわけなんだが？」

上司にそう言われると、山田は一瞬考えた後きつぱりとこう言った。

「僕も自分はサポートに回った方がいと思っんです。一度技術者としてやり直しをさせて下さい」

(意外……)

カスミはてつきり山田が反論してくると思っていたので、すんなりと要望を受け入れたのに驚いた。

「分かった。なら私の方から山田の配属先については考えておく。山田は引き続きのための準備をしているように」

「はい」

その日の帰宅途中、カスミはいつもと同じように公園を横切ろうとしたが、昨日バルルに出会ったことを思い出し回り道をしようと右を見た。

「こんばんわ」

右を見た次の瞬間、カスミの目の前には昨日と同じ身なりのバルルがいた。

「お前が邪魔だと思っていた奴は山田というのか？片付けてやったがその後はどうなる予定なんだ？」

バルの言葉を聞いてカスミはドキツとした。

カスミが何か言わねばと思ひ言葉を探していると、バルが先に言葉を続けた。

「私と一緒に暮らせばお前の困りごとをすべて排除してやるぞ？ 悪い話ではないだろう？」